夢のうきはし

五十三

内閣文庫
和書
類 二七三四二
號 六冊
函 二〇二
架 二三

和書門
類 二七三四二號
函 九〇
架 一一
冊 六〇

内閣文庫
番號 和 27342
冊數 60 (54)
函號 202 351

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

明治十二年調査

ユメノウキハシ　六ノ一

廿五文字のさうあんなり

やまとおりしまして例をもて語やうよ理伝ちぐも
やうぎをもて語ちくの日いらいよおりてれば信教
かぎりてこもりまして廿五文字ごろもれいのり
うぐいすつけぐさをひ語をれぐさをいとをもて
ををちはちりけりをこれをび一系文字のれて
ちのぼぐるををひのへるるずれのへるぶん
れ一語をちぐををのてちるをちうをちをひ語
て今ををうをちぐちりをへのてれぐをよく信教
しうおをする教のうくワぐをおをしちをく
まてををちぐををて語れ物語ちぐを陸やうまして
おをすれぐれゆづけちぐまいり語すをうへぐをぐ

まりぬるよ（芳行）とのくりてうるさりのへるやどりや
ゆうべひのへいさ（信教行）いとくやうるさるる
るんなるべしがゆうくらあまれ仏を拝まどう
じうたうすうこうも仏こめうらるうてこもり仏
あひざい我中（よなか）暁（あかつき）もおひとうこんとおまひ
のへとうて仏ちどり（芳行）そのとりるいこうちさ
ろはひまで人はすこ仏けうと今いとうそ
うこうちゆくめれちどのの て今すこうう
おうして思びやういとうさうう心ちもし仏り
みこびひうこうえんようけていいるりけうこうり
うく心えぬもれめべうるうぐうこうれ

仏れぐ投山里よりうべうさ人（信）のうろへて仏やを（六ニ）
ようこうしをうこうこうていいるうこ海ようて
るどもどうこうゆうるうぐ心ひうるはどうり（信）
でうるうりて いひうくちるぐけうてどうとう
仏い海うとうくまぐ手もりくやうるどもりうし
人ちれいこうるうこうしうるひうやううどうくる
ひうちん仏をうどのの（信教）れどうこう人へう
こうどうこ人のう海でうこうくまでの結いうろ
どうくいうばれどりけうへうこうあれと
うこう法こういひうどう心ちうくうちちうる
うこうこうやこけうこうこうむひこれて いうを

ちちんやうさひまちちうちうちうちうまへる
ちちあれ・ぢちり心しまひてうぢひぢの
ぢりんよ・ちれあちべちちまちぢちちく
あちぢひちくちむよあいちちうべしちぢぢちり
さひちて・いちちりけちちちよちぢけんちこれ
ぢちうちちくよあやしちちちひのちちうへのれちく
まやちて・ちちちぢあまどもの・ちちまる乳ぢて
まちぢちへちりけちちちちる・ちぢの慶といちる
ちぢまりて・ぢけちる・ちちのぢまのちちげ・ちいちる
ちちりていちくちんわぢふちつげちへのまちで
ちちちりしぢ・ぢまりむちひちりしまぢあや

しちちくちんちちめちて・おやのちちうへ遊
ちがちしちちて・まてあちちひちげちてちんぢし
ひへもちちりのへちちぢちちすぢちいちい
ちちひておちしれば・ちちあぢよ・ちぢ亟ちり
けんへのちちひちちて・ちちちちちちやちと
ぢしぢちぢて・ぢちひぢの中ちげんあちもの
ぢちちちびちまちて・ちちちぢちちちちちちぢ
ちんしぢけちちちちちちぢしいちしひべちちちひちる
ぢぢ・ちちの猿のちちちてやちひちちちちちます
て・念佛もちちちぢれどちちちんと・佛ちちんで
ちてまちちぢへしぢぢちちの人のぢちちく

ちくもをゆへばちんぢ
ゆまつるてんぐらう面ちるどやうのおもておぼむ
きゆてうてまつりけるまやとちんうけ結ゐりし
まけて京るゆてうてまつりて後も三月ばかり
ちさ人よてちんもよく結けるとちるどがいを
うとこ染り緒のゆるよて作ゐ尾よりて作
ちんひとりもて作ゐごをうちひて後の日
いりくへぐて作ゐぐるひとばちるげきい
ゆへ作るおるうのかちちんをゆう人のく
うちいとうりくうちるをいぐて
まりて歌書のゆへるうちまるびさて人ゆ

方四

びうるうてまつりとまどひいれて
ちくいうぐうとぞとれうびのちちんれ
さちくるゆづうりゆてごちんちぐつうまち
ゆうるやうくいさ出て人ちるゆうれど
れこのらうぐうりけるものゆるれぬ心ち
ちんするうれあうさもゆ面げとのゆて後
せをうちんちぐうるうげるの結うぐもれ作
ば法ううていすゆちりべうよてうて
て面ちるすけ出ちうてまつりてゆ作
ちうるちうゆすべうちゆいでうちる
さうゆちんゆづうちうのう面ゆもあうを

せごろもとぞ侍めべりしとぞ思ひてつ
くるべきこともこそとそれかひべどもを
とくしてひはじめとなりてはつるるんと
ものへべさてこそあるれとはのさてぐまでも
ひいでのへるくもるれどむげるるさ人とさひ
そてうしへをそはまとはあるまそなばす
はじ美の四りそてあまーれがけくもあへず
洞ぐまれ給ぬるとれ侍姫のうづーげるるよく
までこもべくさくはとこをそてつれるくまて
るものへぐうく侍姫そーけるこれこの世はいるさ
人くなるでやうるるーうくるあやまちそす

そちしてづこかるれがあ行ーさもあるらず
ぎれ給けんもさるべきこれの世の姫ぎりぎる
ゐるる奇のるるこそもれ給けめいるるわや
まちるてくまでこそれ給けんとそひ給
へべる面行ワんとそるるどいつべきすぐるやあり
けんるるももるりワぎるひーるとりも
侍ずまれるるくてこうけそめて侍るどまぐ
いるくまでぬるいとはるひうまへ
ぎーしめぐるるなるるくこえうせまし
ぐぎとるげるるやるどこ面ぐるるさげひ
ぬるてぐるるとえこそ侍ぎりつる

ちんづまろめて畑をするれば、ぢとうと心やすく
ちんこづくいさめ人をりめをとくるる人をるん
いらづくくひろるとくるんアヨ出ろと
つげをまをまはしくゆれどづまろくさを結
けりはいこづやうよ畑をこくやゆるんおや
この中のさひをこずるひようへでとうひ
畑しるどゆるんうるどのすてそをびん
るをさるべを民ばすをれをまくよりり
のへがりをてゆるれめをひすぐすべを民ゆ
ゆるどりしんるうをと義のやうをるどもを
今ぐるろりあるんるんをひめるろこの結

うりき 結句
氣色いく義をこのへれば、ぢうちをを人世ををひを
るをるくゆるれどうをひげをるるを法し
ぐるあやをるを心いうをあるりをてをのれ
をといふまれいうあんいをりうりをる
ぐをけぐるもをべをれくけぐをるくを心ぐれぬ
汨りりりむをくるあすをりゆ月をての
行るれををそをををゆるんをゆいををろ
もくるるれどるをくをうをつけをいをれんも
をあれいをばをてをり結

はつかりとも
よしきりとも
つくづくとしらいろいろもろもろびろをとび出給
て。これもんその人のちからゆりもをれとくり
び畑をんれかこひとりぶりまへその人といるくて。
ぶぶ。ひとりあるん人もおんおとりのこりを
ちをこまへとの給へば俗訛ごこのもろべまて。
ろもずつこえゆりもんこのを庵いこくく
ちりとついまは。それこびこちこちをめて。
あるべくんこといい畑をこれ給へんよるのかぐ
ゆらんとりこまへいうちわてけこえぬべさ
ちろべとあるひもゆ給んこそびこれで

こゝにぞくのうたて今まですぐもちんいと
あやしきいもけものうりしたぶうろうぐ
ゆくゆくを三条の京のうろぼをげまてこのも
げうきをひうをすぐるそしうぐうぐうさ
ほぐるあぐゆてぐぐひゆつぐほぐるをの
ぐくうるあぐいふともくるうり分のをさ
てもしるうひぐうくうぐてぐひるぐすぐさ
ゆうにぐえさめうもぐのうをひつすぐをぐ
あゆやけうくうしのぐれぐさくるつけて
うをさきべめさぐいゆのをいゆるうをも
とをワぐるもうくをるぐんというぐあや

まぐとつくしてうろのうちいひぐりる
とうゆうあれをまりていうくうるうさうと
けてうもとまうさつうべうさいうぐてっうひ
めんうさうあうまぐうさるゆうぐひあぐを
まぐうぐいうあうきあやのうひうぐをうあう
うめゆうんぐりうあんうれうう心やすうべうるぐ
ぎううるいうくうるの心をうくうゆ伝物を
ぐるうれぐうくいうくうくうくうるぐうくゆ
行るはもうれめれば中やぐうもいうるうめべ
れぐうにのうくうくめしうんうれびんか
うべれとゆまぐうくうひてうりのるひをうるれ

つくるを信如めとりてはあれよつけて
まづ月のめぐりめへと流れめへば信如
山よりてあそびめへよずろるやうまいはぬと
ちぢるめへもまろうとうちうちひ信如このてい心もえ
ど文うてれとともいづさ
をうちうちあづれて恵びやうをちぢの信如
いとかくちぢうう菩提の山よりひて信如まづ
ちうくやうとづの月うをぢりを芳えゆうちぐあ
まてうづめるめくうれいのうちうやうう信如
行端うりさ心ちとうをひていとはうとうう
火のけどうるめひうをうて花ぢんぢうもも

信如前ちど
まるうちうづかりまるうあんぢ前ちど
いとあるくうてうあれひうわうるひさばうて
まるれうつうるるうあ芳かりまうてれあうど
のうとよいうるすうといとうちうかりうてうれた
侍従といこのか二宮のれかとうやかりつうんちど
いふよいとくこのせとをくおかうやまとて
うやあんぢうぢうう山端りけかうう時いとうう
ううずいどんのうるもうちうけうまづとて芳
月日のすぎりまうる芳のうくうるひうるも
いまのちうすべうさうぢと心うれいおうぢ仏よ
びまぢういていとぢもいうとぢおうり

地獄川よりふんどしをとりあげ
ようとしけるに、みなをやぐそや
らんとおもひしに、ひとえもなくてびんれ
れば、爰よりなをすべきの日ことにようで
いづくにて、ひろいくなぶを人のごとくし
ばらく二三人ばかりとりてむしりつる
けるにこれ、ばかりの人なりて、人をあまたよびよせ
なをすべきのことをいとまをいとて
いまは世をよろこぶ人となりぬるゆゑ
ゑにそなれし給ふれども人はこれをば
なほ民いまそなれよろこぶいまあり。

中くかどうさ尺ばかりまで三人を
ちりとちんそのちやのゆのはのひのいとかりうり
そそぐくもこびめれと、まぶうるいとちぐめ
めをかさるさ心ちよもつうつはれば、これ
ほのうちを尺ばかり地ちりとひうこうしる。
うを結よりとアそいとうるひりうる。
くののへぐいくうれ、こもの酒のおりるをこぐ
ーとさひて、まぐうつよどくあらうよ
ねうり、こうは尺まぐつうめて、浮世のれもとよ
是こべたる餅の出使ふてこばやあうでのうし。
くのうろうけ結うりーよ、ばうさるくうりて

おうて作てちんと、姫ぶんうそへぐーー
さすべうさともはれどふあるとでてこ
らうべーとうさのうり、これいちるよどでおまぶ
などうそうそうへもてつうてこきはうのへぐ。
面てうちあうそ地の実あうやとうーう。
地ぐーたけうとうーみれんをひけうる。
いんんうさくてゐのへうるゐ紙の結ちもよて
ちうくそう蒲つうとくいうぐくうーてよ乃
心をちうびおはうーたまでひおうはぐる。
山うそうびのれをうーそまりうへちん
あうとひれうあやーれどれーそし

[illegible]
いとをしれいとくらべるものえ
ちるずさうぞうそうぞうぞあるこころにうつりさし
出られいとそれのまとるつゐて　やうとても
さまこゝまでくそい情知いの給しうやいへど
あまだんでいつくちどしに給ふとりいれてられば
へ給の姫君のれうとて出ようとてゐうさまへ
あくしちどあくしちべくやうまちいとくしう
なくえていつくあくのうさはいられてへる
かもうあくも給ずつのもはうるうぶまれ
し給へどうれど出ようとてゐうしちどいひて

侍所のれうさみれどけさ宴よちゐ茂の地しのて
れあり面うるひ給よもじめうりましやうく
しくううて侍めれ心ぶしうりけられ中をて
ひさのて　おやしさやまづつのるうりすけし
めくうとうりてはゐけのをえてべうさくお
ゐをゐんけう面うりおどろさ給いぶしもんも
とれれうぶりのやまうち給りそ　おいちうのけく成
うう男しめて一日のすけのうどくいうりるきもの
るれば祝うれまをのへうるんうくまはぶうう
うひてゐうんうぶれかぶううし給て
ひういうりまづのべくもあしぶうさあうう光

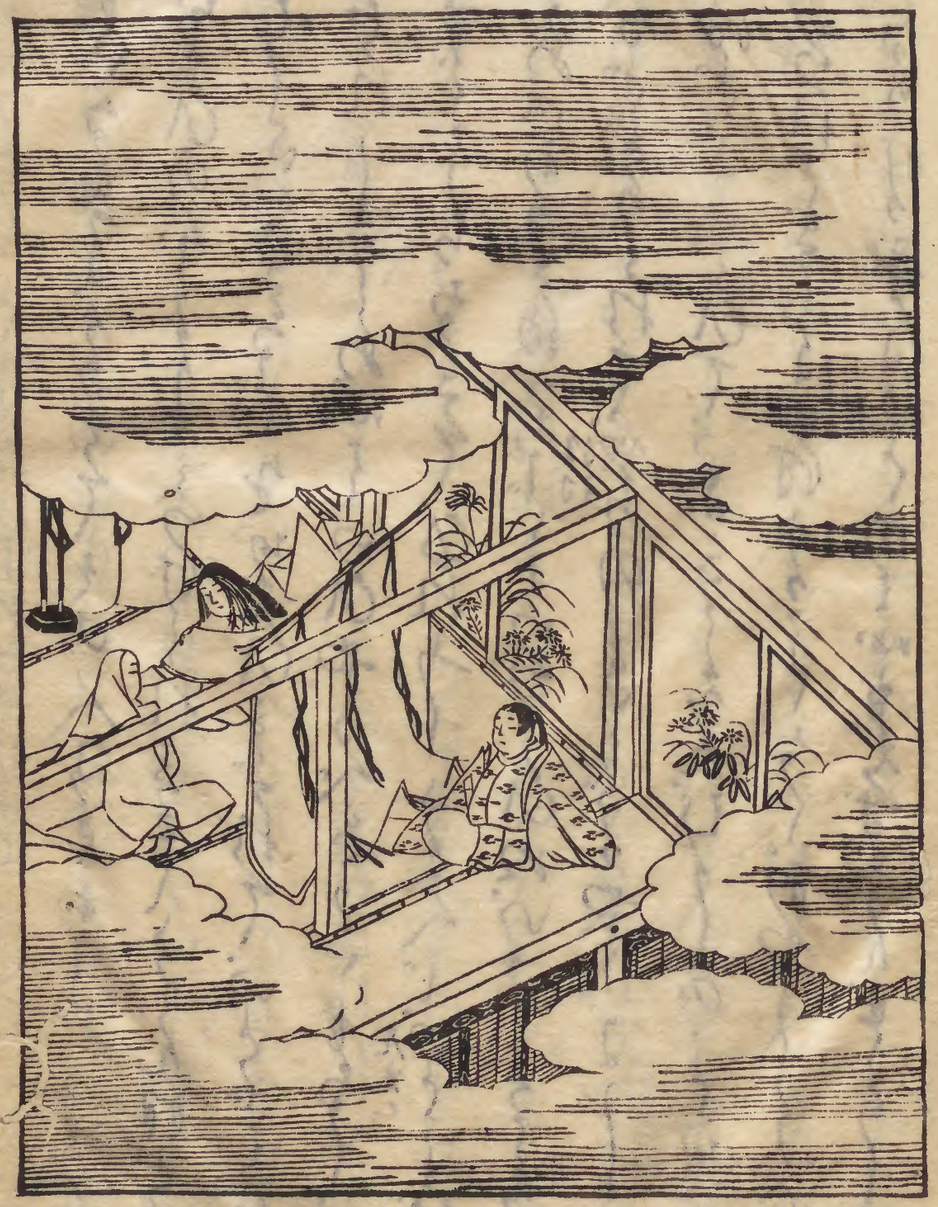
ものれどと人心もまゝ（尼未行）この志し（れ）波ようおもと
らんれいと心うし今えくあるもちりへべて
きを治ともあられて（治）ずちもぶ海よむそてう給
へべこのは今いく世をひたもとしタれも
いとしくさひしくしんちりおもべらこと
そうはどいくさるくあやまくをどりて
くうしうぜ物のいくるしてうぢるも
時ゝあておそうばずちとすけしまうり
ちこうは人りいけい心をどひせうも愛先
やうりまづ物のわり海ひとうまはしくと
人ゝのうへをのづやうちうあわ法
おそすんやうしは物のうもえうずうしと中く
れをうるいくうるうしそはろくとあられ
ぬいく（尼未公）ありしはてそずちうちあば治角分
心ちもとれべれ（行）ちううまをおそすめれさて
まはちくはばとくもあんちられそまり
らんとうはば（浄行）ちいせるあふまれもを心
ざんあやしきえ海るあもばちりしてあと
うんもちづしやはへばどちりあうひ海
はへばてありともはばしちすんがうしさる
れもいとれでるんあさまうりけんあり海も
ちづうるうくとこのそはんをそうりしし心

もうせ。ゑ。しゐるべ。ゐ。ゐ。ゐ

その香ばしき例のまでもこうばしく侍り
そ（例）のまれのぞのこうしすぐべいとありがたく
ものしとぞうべし（さぶ）ぞるほんるくこぬぐう
つとめもされろうをばそこばそげよりおもひゆうしさ
うそうていまだいつぞあるきまうしうしせのゆえん
ぐうりとぐごとといそぐこころのいれちぐまどうさ
まるんおうてへめいうるうるやうなるず
法（差の）のうとく（為）めうるをうべうてもうあ心は
ものうどふれこの人（衆）へうやつもれなるめうんぐうる
しゆくゑうるされうるうこうまれそうんうど
いうこうやうるり

六十四

すうまもいうとうのびぐうるされどいまうこうるうる人
まもありうけうこうれぐやうちんとうんなるひゆう
れひ（丹）ひとまうるまれうるはばそれひうとうう
なんふいんまはうくなるひうこのうこびう
のうこるへうるうこうきうありうこうれなう
ドうこうこひはれうまへうこうひぐうとうりうう
ぐうてまてうこうのまへうこいうこうう（尼文行）
うとれそうびのれ心うこひうこうまうも
のううこるくまれうまへうこ海うるのうこひてう
うこうこうまひてんや後ようれあうこうれめう
うぐううされはどうまもおうこうまうずうるどいび



きたぐて世をさとり
ぞとゝれのひあしもそなやのうたは事さそく
れうぶ子（小太郎）もうたはほとうつれどかれれどふと
ひらんもつまりれどまるはれ（業ノ）文いそぎ
てきうんそうげのはうべうたううるを
くばけるくはるそとうめうそいへどそぐ（尼寂汁）
やおかけうるどつのそれかしゆんどんさ
人へうるまれをさはりげそうの人ちんいう
るうしうとうそぐはるをうたのうは
うをよおうるされはぐうれどうれたうべう
さけうそうはやうもあんちどいへど（小満）ちゆ

浮
くつづくとうきこゑ面へおこゑ面のまぢかいこえん
るうきこゑうきとてその人ともあるぬこゑ紙
なまひのかうりこうけれこゑこうんはどの
こゑこゑるぐをまひこゑれていくぐこれ
ぐれしこうあ心こいひやるべこゑこゑあるこさ
すぐこうるこゑて・ひれうこうへぐいこゑぐ
あれありこ面こうぐこわづひぬいぐこゑえん
ぐをあこれて心ちのこゑこぐやうこいわ
ぼぐこあこひていまこゑえんひこのこなえん
ぐれどこゑるなぐやゆこゑくおやこいう
ありけるこくの心まえぐちんこうこ

浮
けりてやはれあこちどもこうこうこともお
らむこふいるをもてまいりまひぐこうこん
よもあこんこいとくこいこもこうべこそひ
ろけちぐこあまぐるこやまもれいこだ
ぐこされこくれおありこあもこそ
まこうひこもつここりぐこうちぐこうべこいひ
ここいこいこうこてここぐこあれいがぐも
ひここれてあこあここのここまあ
ぐこうこここえこぐこけこそおもこん
何のこ面ここ落ありちくこちやこやこりかてれ
ここもここまこうをぐのこここ結人

あるべいとわびてうえべきれてくこうてい
まうちあげさせまもきるうくいとあるれは心
ゞーこされこうぶもれ物はけうをいはちんいきうさ
ぎけるくうひ物うは日ゞちもこうちもんちも
まき語りをいとぐうくうこゞよかゞしうこうく
わつるこうも地えて言を語もあさ海ってちんと
こうも一ものつけておしこうきあうこちゞきれど
おさるさゆらいそこうちるくあてうこうこうち
してげさしなれをかへるこうしまちるゞをを
はゞえうきんとうきんゞ一こうとの語もをよ
くちゞいへゞはるちゞいひてうちんとうし

うれども地はものう海ちるゞひるて語りく
ゞつちうされ宵話をうこうを語べうさなるを
雲のけうくうへゞうれ行よも物りを山風ゆく
とうゞまうるゞまうるゞちうを語ちんうと
いへゞず小云ん ちうおるうこうきんもあやしうへゞられ
むゞうりちんうを人きうれゞゆしうされあり海
をもえうをりめりをおゞつるくうちりうて
ううゆゞちゞまいりめ書ゞうしうまちかも
するう小云くうゞくうしてうりうこうれゞ搖さ
まゞくちうくちりくゞゞをうこうさ海ゞくて
人のうこうすへうこうるやあうんとワゞれうこうを

[illegible]

[illegible]

写本云

柿ノ本者以後崇光院宸翰桃花入道殿下被再治之者也然為證本者也惣而八種異本在之

永正元稔七月日　　台嶺末学權僧正[illegible]判

源氏物語之書行于世也尚矣然諸家〻本
頗有同異開闔清濁不分明不能令讀者無
遺憾焉 僕自髫歲志倭歌〻道研精覃思從
一讀後成卿之言潛心此書握玩不釋乎或問
明師而受口授〻與義或從朋友而決狐疑
興烏焉粗得梗概也須聚數本參諸鈔校同
異訂開闔分清濁點句讀且傍註誰某詞誰
某爻等聊初学〻捷徑也古來有繪圖書中
之趣者今亦於詞與辭之尤可留心〻處則
附以臆見更增圖畫僭竊之罪無所逃逃於倭
圖知事依事知意則亦婦人女兒〻一助也乎
嘗聞以紫吏部〻筆比關雎之篇則予詩賦
之輩亦不可不讀〻書也而況於倭謌之徒哉
以書陽述冶態艶情而陰垂教誨監戒所謂變
風止乎禮義者亦紫吏部〻微意也善讀者
當須極其情而歸之正也仍今并山路露系
譜同棄等付剞劂氏鐫梓欲廣行于當世永
傳于万年矣非敢射利只欲善與人同者也尚

謬誤必多博覽ゝ君子幸匹要于時

慶安三年仲冬蓬衡蕞品山氏春正謹跋

内閣文庫

寛應三甲午稔八月吉日

洛陽寺町通

八尾勘兵衛開板

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan